



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	特定の対象から得る安心感と日常的な意欲との関連(fulltext)
Author(s)	古澤, 里恵; 奥住, 秀之
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 60: 237-243
Issue Date	2009/2/27
URL	http://hdl.handle.net/2309/95640
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

特定の対象から得る安心感と日常的な意欲との関連

古澤里恵*・奥住秀之*

特別支援科学講座

(2008年9月26日受理)

1 はじめに

愛着とは、養育者と子どもとの絆を説明する概念として Bowlby によって理論化された概念で³⁾、子どもの社会的能力とパーソナリティの発達、自己と他者に対する発達の観点の枠組みとして発展した。愛着理論においては、乳幼児期に形成される養育者に対する愛着は、その後の時期でも内的作業モデルの形態として持続されるとされ、愛着の連続性が示唆されている。今日、この考えに基づき、青年期・成人期における愛着スタイル研究が行われている。

青年期・成人期の愛着研究においては、愛着スタイルを測定し、それと個人の適応性や対人関係などとの関連を調べる研究がよく見られている。Hazan & Shaver(1987)は、幼年期における3つの愛着スタイルの記述を基に Adult Attachment Scale (成人の愛着尺度)を作成した²⁾。そして、尺度を用いて、愛着スタイルによって、幼児期の家族関係、父親や母親に持つ印象、これまでの恋愛経験などの特徴的な違いを指摘した。金政・大坊(2003a)は、愛着と精神的な健康状態、親密な関係(恋愛関係)における自己認知との関係を検討し、安定型の愛着スタイル傾向の人は、精神的健康が良く、親密な恋愛関係において自己を高く評価する傾向にある報告している⁵⁾。さらに金政(2007)は、青年期の愛着スタイルが自己認知に与える影響について、恋愛関係のみならず友人関係における自己認知においても愛着次元から検討をし、「親密性の回避」という愛着次元が個人内の適応性と相関があることを示唆している⁷⁾。

ところで、成年期・成人期の愛着研究において、対象により異なる愛着スタイルの存在を想定した研究もなさ

れている。本来、愛着は特定の対象(養育者)に向けられる情緒的な結びつきとされているが、発達に伴って愛着対象は拡大し、結果的にひとりが複数の他者と愛着関係を結ぶことになる。そして、それぞれに結ばれている愛着は同じスタイルではないことが示されている。Baldwin, Keelan, Fehr, Main & Weston(1981)らは、成人の被験者に10の重要な関係それぞれの愛着スタイルを検討し、被験者の88%は Hazan & Shaver の愛着スタイルの2つのタイプを示し、47%の被験者は3つの全てのタイプの愛着スタイルを示した¹⁾。Richard, Ryan, Couchman, & Deci, (2000)は、家族以外の重要な他者を対象として、対象による愛着スタイルの異なりを検証した⁴⁾。その結果、対象によって愛着関係から得る安心感が異なるという結果を示した¹⁰⁾。そして、そのような異なる対象から得る主観的な安心感が well-being にポジティブな影響を与えることを示した。しかし、対象により異なる愛着を想定した場合、ある特定の人とは安定的な愛着を結びそこから大きな安心感を得ていても、他の対象とはそのような関係を結べていない可能性もある。しかし、その点の検討はなされていない。大きな安心感を得られる愛着対象を持っているということは、意欲やパーソナリティにどのような影響を与えることになるのか。

本研究では、特定の他者から得る安心感が日常的な意欲に与える影響を検討する。その際、特定の他者から得る安心感と日常的な意欲の関連をより明らかにするために、愛着スタイルの2次元である自己モデルと他者モデルを用いて、それらと安心感・日常的な意欲の関連に注目する。

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

2 方法

(1) 対象者

被験者はある大学の学部生・院生112名で、有効回答は110名（男子44名，女子65名，無回答1名）であった。質問紙は、直接配布・回収した。回答は無記名で行った。

(2) 質問紙

質問紙はフェイスシートを含め五枚から成る。フェイスシート（学部，学年，性別）と，特定の対象から得る安心感尺度，一般他者版愛着スタイル尺度，日常的な意欲尺度の3種類の尺度から構成されている。尺度の評定は全て，7件法（1＝“まったくあてはまらない”から7＝“非常にあてはまる”）を用いた。予備調査を経て項目の削除・変更が行われ，最終的に，特定の他者から得る安心感尺度が16項目，一般他者版愛着スタイル尺度が29項目，日常的な意欲尺度が19項目となった。

1) 特定の他者から得る安心感

回答者が最も「安心できる」「信頼できる」と感じている他者から得る安心感を測定する尺度である。金政・大坊(2003b)による，関係への満足度およびその関係を重要視する程度を測定するための関係満足度尺度(2項目)，関係重要度尺度(2項目)を用いた⁶⁾。さらに，ある関係が愛着的繋がりとして定義されるための特徴である，近接性の探索，分離への抵抗，安全基地，安全な避難所の4つに相当する質問内容とさらに相手から受け入れられていると感じているかを測定する質問内容を作成した。

質問紙の先頭に『あなたと関係を結んでいる他者の中で，「困ったときには必ず助けてくれる」「信頼できる」「安心できる」というような感情をいただき，自分にとって重要な他者であると感じる人を思い浮かべてください』という教示を提示し，そこで想定した他者（複数いる場合はひとりに選択してもらった）との具体的な関係を，

母親，父親，きょうだい，友人（同性），友人（異性）恋人，その他の中から選択し，その人物との関係について被験者は質問紙の回答を行った。

2) 一般他者版愛着スタイル尺度

青年・成人期の愛着の2つの次元である「関係不安」と「親密性の回避」を測定する Experiences in Close Relationships Inventory を邦訳したもので，中尾・加藤(2004a)がその妥当性を検証した⁸⁾。この一般他者版愛着スタイル尺度は，愛着次元の「関係性不安」(18項目)と「親密性の回避」(11項目)を測定する尺度である。

3) 日常的な意欲尺度

状況や文脈によらない日常的な意欲を測定する尺度である。Vitality 尺度 (Richard & Christina, 1997) の7項目を邦訳して用いた。さらに，積極性(5項目)，新しい経験への積極性(3項目)，楽観性・ポジティブ傾向(4項目)を測定する質問内容を作成した。項目は全19項目である。

(3) 統計処理

得られたデータをコーディングし，SPSSにより統計解析を行った。なお，因子分析については，因子間の相関を念頭において主因子法・プロマックス回転を基本とするが，一般他者版愛着スタイル尺度においては，中尾・加藤(2004b)がバリマックス回転で行っているため⁹⁾，それに従った。

3 結果

(1) 各尺度の因子構造

1) 特定の他者から得る安心感

項目分析により7項目を除外し，残り16項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し，2因子を抽出した(表1)。第一因子を「依存」，第

表1 特定の他者から感じる安心感尺度の因子分析結果(プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II
A13 もしその人がいなかったら私はいまより物事に積極的になれないと思う	.76	.76
A7 私はその人とのつながりを失うことをいつも不安に思っている	.64	.64
A9 私はその人とできるだけ多くの時間を過ごしたいと思う	.60	.60
A5 私はその人との関係を支えに生活している	.44	.44
A2 その人は私の望むことを満たしてくれている	-.15	.77
A12 私はその人は自分を非常に大事にしていると感じる	-.08	.75
A10 私はその人がいつか自分から離れていっても仕方がないと思う	.23	.63
因子間相関	I	II
I	—	.65
II		—

二因子を「満足」と命名した。

安心感尺度の2つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「依存」下位尺度得点(平均4.26, SD1.26), 「満足」下位尺度得点(平均5.54, SD1.04)とした。また、「依存」「満足」に含まれる全7項目の合計を算出し「安心感合計得点」(平均33.65, SD7.18)とした。

2) 一般他者版愛着スタイル尺度

項目分析により, 1項目を除外し, 残り28項目について主因子法・バリマックス回転による因子分析を行っ

た。因子負荷量の低い4項目を除外し, 2因子を抽出した(表2)。第一因子を「見捨てられ不安」, 第二因子を「親密性の回避」と命名した。

3) 日常的な意欲尺度

日常的な意欲尺度の因子構造を検討するために, 主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い, 十分な負荷量を示さなかった2項目を除外して3因子を抽出した(表3)。第一因子を「vitality」, 第二因子を「ポジティブ」, 第三因子を「新しい経験への積極性」と命名した。

表2 一般版愛着スタイル尺度の因子分析結果(バリマックス回転後の因子行列)

	I	II	共通性
B10 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.74	.24	.61
B6 私は知り合いを失うのではないかと結構心配している	.74	.13	.56
B4 私はいろいろな人との関係について非常に心配している	.68	-.04	.46
B17 私は(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない	.65	.19	.46
B19 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら, 私はきっと気が動転して, 悲しくなったり腹が立ったりする	.65	-.06	.43
B8 私はいつも, 人が私に対して抱いてくれる気持ちが, 私が人に対して抱いている気持ちを同じくらい強ければいいのになあと思う	.56	-.06	.32
B2 私は, 見捨てられるのではないかと心配だ	.53	.16	.31
B29 私は, 知り合いが私のことをほっといて自分ひとりで何かをすることが重なってくると腹が立ってきてしまう	.53	-.11	.29
B5 私は人のことを大切に思うほどには, 人が私のことを大切に思っていないのではないかと心配する	.53	.14	.30
B25 私は, 私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないとイライラしてしまう	.50	-.03	.25
B15 私には, 人が私に対して好意的であるということは何度も何度もいってくれることが必要だ	.49	-.05	.25
B23 私は誰かと付き合っていないと, なんとなく不安で不安定な気持ちになる	.47	-.13	.23
B27 私は, 人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする	.43	-.12	.20
B21 私が親密になりたいと望むほどには, 人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う	.42	-.01	.18
<hr/>			
B11 私は, 心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない	.03	.76	.58
B20 私は人に何でも話す	.00	.70	.48
B7 私は人にこころを開くのに抵抗を感じる	.07	.70	.49
B1 心の奥底で何を感じているのかを人に見せるのはどちらかというと好きではない	-.10	.68	.47
B22 私はたいてい, 人と自分の問題や心配ごとを話し合う	-.13	.62	.40
B13 私は人とあまり親密にならないようにしている	.19	.62	.42
B3 私は, 人と親密になることがとてもこちよ	-.04	.56	.32
B26 私は, 人になぐさめやアドバイス, 助けを求めることに抵抗がない	-.05	.54	.29
B24 私は人に頼ることに抵抗がない	-.05	.51	.26
B18 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない	.11	.47	.24
<hr/>			
因子寄与	4.72	4.07	8.79
寄与率	19.68	19.95	39.63

表3 日常的な意欲尺度の因子分析結果(プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
C10 私は自分が生き生きしていると感じる	.73	.28	-.22
C13 私には活力と気力がある	.71	.15	.05
C12 私には精一杯やれないことがよくある	.71	-.14	-.08
C9 私は, いつでもベストを尽くしたいと思う	.70	-.33	.19
C14 私には自分にとって難しい状況であってもあきらめずに取り組むほうだ	.67	-.31	.16
C19 私は自分が精力的だとは感じない	.64	.11	.08
C18 物事に対してどうもやる気が起きない	.62	.02	-.07
C11 私は新しい日を迎えるのが待ち遠しい	.60	.09	.11
<hr/>			
C3 私は小さなことでよくよと悩んでしまう	-.15	.71	.10
C15 私は基本的に自分にとって都合のいいように考える	-.23	.66	.11
C6 私は物事を悪いほうへと考えてしまいがちである	.04	.62	.17
C5 私はたいてい気分がすっきりしている	.28	.54	-.05
C17 私は自分が元気だと感じる	.48	.51	-.07
<hr/>			
C7 私は失敗する恐れがあることにはなかなか踏み出せない	-.09	.14	.70
C1 私はできるかどうかわからないことでもとりあえず挑戦してみようと思う	.25	-.11	.61
C16 私は新しい経験には躊躇してしまう	-.11	.28	.59
C2 私は自分が活発すぎて発散したいと感じることがある	.17	.13	.40
<hr/>			
因子間相関	I	II	III
I	—	.40	.44
II		—	.17
III			—

(2) 愛着次元と特定の対象から得る安心感, 日常的な意欲との関連

愛着スタイルと特定の対象から得る安心感の関連を調べるため, 各尺度間の因子の相関を算出したところ, 「見捨てられ不安」と「依存」の間に有意な相関が ($r=.23, p<.05$), 「満足」と「親密性の回避」の間に有意な負の相関が見られた ($r=-.22, p<.05$) (表4)。自己モデルがネガティブであるほど「依存」の得点が高まり, 他者モデルがポジティブであるほど特定の対象から「満足」感を得やすいという関連を示している。

愛着スタイルと日常的な意欲の関連を検討するため, 「見捨てられ不安」の高い群と低い群に分けて, それぞれの「安心感合計得点」「依存」「満足」「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」における平

均値を t 検定により比較した。その結果, 「ポジティブ」($t(107)=2.61, p<.05$) で, 「見捨てられ不安高群」よりも「見捨てられ不安低群」のほうが有意に高い得点を示していた (表5)。同様に, 「親密性回避」の高い群と低い群の2群において, それぞれの「安心感合計得点」「依存」「満足」「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」得点を t 検定により比較した。「vitality」($t(107)=2.01, p<.05$), 「ポジティブ」($t(107)=3.61, p<.001$) 「新しい経験への積極性」($t(107)=2.31, p<.05$) について, 「親密性の回避高群」よりも「親密性の回避低群」のほうが有意に高い得点を示していた (表6)。愛着次元の「親密性の回避」の低い, つまり他者モデルの高いほど, 「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」が高まることを示している。

表4 各下位尺度間の相関行列

	安心感合計	依存	満足	見捨てられ不安	親密性の回避	vitality	ポジティブ	新しい経験	平均	SD
安心感合計得点	—	.93 ***	.80 ***	.17	-.08	.15	-.03	.05	3.46	.97
依存		—	.52 ***	.23 *	.02	.13	-.08	-.01	3.75	1.10
満足			—	.02	-.22 *	.14	.06	.14	4.68	1.10
見捨てられ不安				—	.03	.03	-.27	-.18	4.23	1.16
親密性の回避					—	-.34 ***	-.37 ***	-.24 *	4.33	1.12
vitality						—	.45 ***	.47 ***	33.65	7.18
ポジティブ							—	.39 ***	4.26	1.26
新しい経験								—	5.54	1.04

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ 表5 見捨てられ不安高低群の平均値とSDおよび t 検定の結果

	見捨てられ不安低群		見捨てられ不安高群		t 値
	平均	SD	平均	SD	
安心感合計	32.81	7.71	34.71	6.61	-1.41
依存	4.11	1.41	4.51	1.11	-1.91
満足	5.51	1.11	5.51	1.01	-.11
vitality	4.61	1.11	4.81	1.11	-.71
ポジティブ	4.51	1.21	3.91	1.11	2.61 *
新しい経験	4.51	1.11	4.21	1.21	1.61

* $p<.05$ 表6 親密性の回避高低群の平均値とSDおよび t 検定の結果

	親密性の回避低群		親密性の回避高群		t 値
	平均	SD	平均	SD	
安心感合計	33.41	7.21	33.71	7.11	-.21
依存	4.21	1.31	4.41	1.31	-.81
満足	5.61	1.01	5.41	1.01	.71
vitality	4.91	1.11	4.51	1.11	2.01 *
ポジティブ	4.61	1.11	3.81	1.11	3.61 ***
新しい経験	4.61	1.01	4.11	1.21	2.31 *

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

(3) 特定の他者から得る安心感と日常的な意欲の関連

日常的な意欲が自己モデルと他者モデルに与える影響について、特定の他者から得る安心感がどのように関連しているのかを検討するため、従属変数を「見捨てられ不安」、「親密性の回避」、独立変数を「vitality」因子（日常的な意欲尺度）、「ポジティブ」因子（日常的な意欲尺度）、「新しい経験への積極性」（日常的な意欲尺度）とし、安心感合計得点の低い群と高い群のそれぞれにおいて重回帰分析（一括投入式）を行った。安心感合計得点低群においては、見捨てられ不安で、「vitality」の標準偏回帰係数は $\beta=.35(p<.05)$ 、「ポジティブ」では $\beta=-.44(p<.01)$ 、「新しい経験への積極性」では $\beta=-.32(p<.05)$ で有意であった（表7）。また、安心感合計得点高群においては、親密性の回避で「vitality」の標準偏回帰係数が $\beta=-.38$ で有意であった（ $p<.05$ ）（表8）。これらは、特定の他者から得る安心感が低い場合には、「ポジティブ」と「新しい経験への積極性」が自己モデルを高め、特定の他者から得る安心感が高い場合には、「ポジティブ」が他者モデルの高さに影響を与えることを示している。

4 考察

(1) 愛着次元と特定の対象から得る安心感、日常的な意欲との関連について

各尺度の因子間の相関を検討することにより、自己モデルがネガティブであるほど「依存」の得点が高まり、他者モデルがポジティブであるほど特定の対象から「満

表7 安心感合計得点低群における重回帰分析の結果

従属変数 独立変数	見捨てられ不安	親密性の回避
	β	β
vitality	.35 *	-.18
ポジティブ	-.44 **	-.19
新しい経験	-.32 *	-.16
R ²	.23 **	.18 *

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ β : 標準偏回帰係数 R²: 決定係数

表8 安心感合計得点高群における重回帰分析の結果

従属変数 独立変数	見捨てられ不安	親密性の回避
	β	β
vitality	.19	-.17
ポジティブ	-.18	-.38 *
新しい経験	-.03	.07
R ²	.04	.21 **

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ β : 標準偏回帰係数 R²: 決定係数

足」感を得やすいという関連性が弱いながらも示された。このことより、金政・大坊（2007a）⁵⁾ や金政・大坊（2003b）⁶⁾ で友人関係においても自己モデルの低さ（「見捨てられ不安」の高さ）が「自信」に負の影響を与えていたことを考慮すると、「見捨てられ不安」が高い場合、その自己モデルの低さにより自分への自信がもてず、それが「依存」的な他者関係を導きやすいということが考えられる。

また、「親密性の回避」と「満足」の負の相関は、他者モデルの高さと「満足」の正の弱い関連を示している。この結果は、金政・大坊（2007）における友人関係での愛着スタイルと関係満足度との関連が見られていた結果と一致する。また、金政・大坊（2007）は青年期の愛着スタイルと関係への評価との間に、相手との親密さが大きな役割を果たしていることを指摘し⁷⁾、愛着次元の「親密性の回避」が高くなると、友人との関係の親密さ自体を基本的に低く評定する傾向があると示唆した。このような観点からみると、本研究における「親密性の回避」と「満足」との負の関連は、「親密性の回避」の高さが、特定の対象との親密さを低く評定するため、その結果「満足」が低くなるということも考えられるだろう。

「親密性の回避」と日常的な意欲尺度の下位尺度の「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」と弱い負の相関があった。この結果は、金政・大坊（1991）や金政・大坊（2007）の結果と一致する。金政・大坊（2007）では、愛着次元の「親密性の回避」が、友人関係における個人の適応性や意欲を低めることを示唆している。また、La Richard, Ryan, Couchman, Deci（2000）においても⁴⁾、愛着から感じる安心感が基本的な欲求のうち特に関係性の支援としてはたらき、結果としてwell-beingを高めるという結果が示すように、他者モデルの高さは他者との親密な関係を促進し、それが関係性支援としてはたらいたことにより、「ポジティブ」、「新しい経験への積極性」を高めるようにはたらくと考えることができる。

(2) 愛着次元と特定の対象から得る安心感、日常的な意欲との関連

重回帰分析により、特定の他者からの安心感が低い者は、「vitality」や「ポジティブ」が自己モデルの高さ、つまり自己への肯定的な感情を高めるが、高い者では「vitality」が他者モデルの高さ（他者への肯定的感情）に影響を与えることが示された。この結果は、金政・大坊（2007）が示した「親密性の回避」と個人の適応性や意欲との関連と一致するものである。一方、「vitality」「ポジティブ」が自己モデルに与える影響に関しては、

主観的な安心感が低い場合には、特定の他者からの安心感の低さを個人の「ポジティブ」が補うことで、自己モデルを高めるということが考えられる。しかし、この点に関しては、本研究においては、自己モデル・他者モデルに影響を与える個人の要因が「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」に限定されているため、個人の要因についてより詳細に検討することが今後の課題である。

付 記

本調査にご協力いただきました方々に深謝します。本研究は、筆頭著者が慶応義塾大学文学部に提出した卒業論文をまとめ直したものである。ご指導いただいた鹿毛雅治教授に感謝します。

文 献

- 1) Baldwin, M. W., Keelan, J. P. R., Fehr, B., Enns, V., & Koh-Rangarajoo, E. (1996). Social-cognitive conceptualization of attachment working models; Availability and accessibility effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 94-109
- 2) Hazan, C., & Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524
- 3) ホームズ J. (1969) ボウルビィとアタッチメント理論 岩崎学術出版社
- 4) Jennifer G. La Richard, Richard M. Ryan, Charles E. Couchman, and Edward L. Deci, (2000) Within-person variation in security of attachment: a self-determination theory perspective on attachment, need fulfillment, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 367-384
- 5) 金政祐司・大坊郁夫 (2003a) 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74, 466-473.
- 6) 金政祐司・大坊郁夫 (2003b) 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19 (1), 59-76.
- 7) 金政祐司 (2007) 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学, 22 (3), 274-284.
- 8) 中尾達馬・加藤和生 (2004a) “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 9) 中尾達馬・加藤和生 (2004b) 成人版愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版の作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 10) Richard M. Ryan, Christina Frederick (1997) On Energy, Personality and Health: Subjective vitality as a dynamic reflection of Well Being. *Journal of Personality*, 65(3A), 529-565.

特定の対象から得る安心感と日常的な意欲との関連

Relationship between attachment security to a significant other and general motivation

古澤 里 恵*・奥 住 秀 之*

Satoe FURUSAWA, Hideyuki OKUZUMI

特別支援科学講座

Abstract

We investigated the relationship between attachment security to a significant other and general motivation. The subjects were 110 university students in this survey. The overall attachment security scale, experience in close relationships inventory scale, and the motivation scale were used. The results were as follows: Persons with a negative self model showed characteristics of dependence. A negative relationship was found between the avoidance of intimacy and satisfaction. Persons with no attachment security from a significant other, have a vitality that affects a positive regard for themselves.

Key words: overall attachment security scale, experience in close relationships inventory scale, motivation scale, factor analysis

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究では、特定の他者から得る安心感が日常的な意欲に与える影響を検討した。その際、特定の他者から得る安心感と日常的な意欲の関連をより明らかにするために、愛着スタイルの2次元である自己モデルと他者モデルを用いて、それらと安心感・日常的な意欲の関連に注目した。被験者はある大学の学部生・院生112名で、有効回答は110名（男子44名、女子65名、無回答1名）であった。質問紙は、フェイスシート、特定の対象から得る安心感尺度、一般他者版愛着スタイル尺度、日常的な意欲尺度の3種類の尺度から構成される。尺度の評定は全て、7件法（1＝“まったくあてはまらない”から7＝“非常にあてはまる”）を用いた。主な結果は以下の通りである。(1) 自己モデルがネガティブであるほど「依存」が高まり、他者モデルがポジティブであるほど特定の対象から「満足」感を得やすい。(2) 「親密性の回避」と「満足」との間に負の相関が、「親密性の回避」と日常的な意欲尺度の下位尺度の「vitality」「ポジティブ」「新しい経験への積極性」との間に弱い負の相関が見られた。(3) 特定の他者から高い安心感を得ていない場合、自己モデルの高さ、つまり自己への肯定的な感情が「vitality」や「ポジティブ」に影響を与え、特定の他者から高い安心感を得ている場合、他者モデルの高さ（他者への肯定的な感情）が「vitality」に影響を与えることがわかった。

キーワード: 安心感尺度、一般他者版愛着スタイル尺度、日常的な意欲尺度、因子構造

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)